

忽ちに枉疾に沈み、殆と泉路に臨む。より
て歌詞を作り、以て悲緒を申ぶる一首并せて

短歌

三九六二番

大君の 任けのまにまに ますらをの 心振り起こし
あしひきの 山坂越えて 天離る 鄙に下り来 息だにも
いまだ休めず 年月も 幾らもあらぬに うつせみの 世
の人なれば うちなびき 床に臥い伏し 痛けくし 日に
異に増さる たらちねの 母の命の 大舟の ゆくらゆく
らに 下恋に いつかも来むと 待たすらむ 心さぶし
く はしきよし 妻の命も 明け来れば 門に寄り立ち
衣手を 折り返しつつ 夕されば 床打ち払ひ ぬばた
まの 黒髪敷きて いつしかと 嘆かすらむそ 妹も兄も
若き子どもは をちこちに 騒き泣くらむ 玉梓の 道を
た遠み 間使ひも 遣るよしもなし 思ほしき 言伝て遣
らず 恋ふるにし 心は燃えぬ たまきはる 命惜しけ
ど せむすべの たどきを知らに かくしてや 荒し男す
らに 嘆き伏せらむ